

ディアン・ローズウッドを使用し、ボディ周囲やサウンドホールなどに豪華なアバロン・インレイがほどこされたレギュラー・ラインナップでは最上位にあたるものだ。916ceは比較的新しくデザインされた“グランド・シンフォニー”と呼ばれる大柄なボディにカットウェイが施されたもの。独自のエクプレッション・システム・ピックアップを装備したエレクトリック仕様となっている。

ボールのアンプはマーシャル・ヴィンテージモダン・シリーズの2266ヘッドのスタックで、3セットを使用(11)、中央のスタックはディストーション・サウンド用として使い、両脇の2セットはクリーン・サウンドをステレオで鳴らしていた。メインのエフェクター・ボード(12)にはゼンハイザーEW300ワイヤレス・レシーバー、ボストンTU-2チューナー、アイバニーズのボールのシグネ

チャーモデルであるエアブレインフランジヤーAF-2、H.B.E.のボールのシグネチャー・モデルであるデトックスEQ、MXRフェイズ90、マジック・ボックスのボールのシグネチャーモデルであるファズ・ユニヴァース、フルトーン・コーラル・フランジ、リール・スプリッター、H.B.E. CPRコンプレッサーがセットされていた。アコースティック・ギター用として別に用意されていたのがボストンTU-2とH.B.E. CPRコンプレッサー・レトロ、そしてD.I.(08)だ。

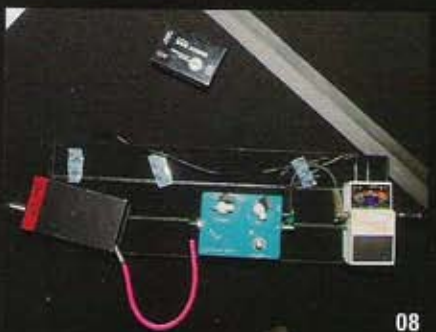
## ■Billy Sheehan

ビリーは80年代後半からヤマハと共同でシグネチャーモデルを開発し、90年にはアティテュードが発表されたが、ビリーのサウンドに対する探求はその後も続けられ、今年のNAMMショーでは最新モデルのアティテュード・リミテッドⅢが発表された。今回ビリーは、シー・フォーム・グリーンのアティテュード・リミテッドⅢ(05)1本のみを全曲で使用していた。最大の注目ポイントは分厚い重低音を生み出すネック側の“ウーハーPU”が、以前はディマジオ製のYBDW-1SCだったのに対し、ヤマハとビリーによって共同開発されたハムバッカーがマウントされている点だ。ビリーの手によって黒いプレートが貼られているため見えないが、ブレードタイプのボールピースが採用されているのが特徴だ。ボディ右下の2系統のアウトプットからネック側のハムバッカーとセンターのディマジオ・ウィル・パワーPUを個別に出力することにより、ビリー独自の重厚だが細かいプレイが明瞭に聴こえるサウンドが生み出される。大胆なベンディングもビリーのプレイの特徴のひとつだが、それに耐えうる剛性を得るため、ネックはボディに3本のボルトの他にボディ中央から45度の角度でエクステンション・ボルトがネックエンドを固定、ハイポジションの演奏性を損なうことなく強固なジョイントを実現している。

もう1本のブラックのベース(06)は、今回の来日時にビリーに渡されたばかりのものだ。こちらはウーハーPUにプレートが貼られていないので、ボールピースの構造が判る。スペックはほぼ共通だが、ピックアップガードのネジの位置が異

なっていたりしており、プロトタイプから更に変化している様子が伝わる。

今回のツアーでビリーは、アンプに関してはハートキーを使用していた。スピーカー・キャビネットはAK410とAK115を4台ずつ使用し、ウーハーPUの低域とセンターPUの中高域を個別に出力している(13)。ステージサイドのラック(14)の左側にはハートキーのアンプヘッドが収められ、上2台は中高域用のモデルHA550、下3台はベースの低域用とMIDI音源用、そしてスピアのLH1000が収められていた。右のラックにはロールズSX21クロスオーバー、イン/アウト・モジュール、ピアスBC1プリアンプ、アシュレー



12



10